

狂人たち

AI兵器

春日信彦

8月3日（金）、マンションに戻ったイサクとヤコブは、世界の異常気象について考察していた。異常気象についての情報は不十分で、特に3.11東日本大震災以降の日本の異常気象についての情報はかなり不確実なものだった。日本の地震は、S波だけの人工地震だとの情報はあったが、これについても今一つ判断がつかねる情報だった。また、謎の兵器研究基地が、ここ数年、日本を攻撃し始めているとの情報があったが、これも確証を得たものではなかった。本来、アメリカにとっては、日本の攻撃は得策でない。日本のGDPはアメリカのGDPとなるからだ。それにもかかわらず、日本の自然が破壊され続けている。いったい、その理由は何なのか？

モサドは、日本についての情報収集に重きを置いていない。というのは、日本の情報はアメリカの情報でほとんどつかめるからだ。ところが、ここ数年の日本の異常気象は全く想定外のものであった。ということは、日本への攻撃は、アメリカ国防総省と直接リンクしたものでないと考えられた。いったい、どこの組織がこのような攻撃をしているのかだ。アメリカ政府の犯行であれば、何らかの情報は入っていたはず。ところが、アメリカ政府の動向情報には、日本への攻撃情報は全く入っていなかった。同じく、ロシア政府の犯行の情報も入ってきていない。

一つ考えられるのが、最新気象兵器開発にかかわる科学者たちの組織が、極秘に行っているのではないかということだ。つまり、彼らが、勝手に最新気象兵器を各国で実験しているということだ。それは、科学者にとっては必要な実験であって、経済的損失を与えるとといったような目的を持った特定の国の攻撃ではない。彼らにとっては、日本の異常気象も実験の一つであって、戦争行為というべき攻撃ではないということだ。そういうことであれば、アメリカ政府もCIAも国防総省も、つまり、誰も知らないということになり、単なる自然現象上の異常気象ということになる。世界各地で起きている気象実験について具体的に知りうるものは、本当にごく一部の科学者たちだけということになる。そうであれば、国防力を誇るアメリカ、ロシア、中国などでも、全く防御できないことになる。

現在、最新気象兵器の開発は、どこで行っているのか？北極か？南極か？アラスカか？テキサスか？ブラジルか？日本か？地下か？月か？皆目見当がつかない。唯一の手掛かりは、世界中に飛びかう電波でしかない。また、モサドが研究基地を発見できたとしても、秘密裏に攻撃できるような脆弱な基地でもないことは予測できる。アメリカ政府単独で研究開発しているのか？数か国で共同研究開発しているのか？これも謎だ。イサクとヤコブは、アメリカとロシアの共同研究開発ではないかと思っている。というのは、最新気象兵器は、狂人たちともいえる米露マフィアたちによる世界支配にあると考えられるからだ。

ただ、気になることは、優秀なユダヤ人の科学者たちが、消息を絶っているということだ。歴史的に兵器開発に貢献してきたユダヤ人科学者は多い。また、天才科学者のほとんどは、ユダヤ人だ。だからといって、ユダヤ人科学者たちは、最新兵器を開発し世界支配をもくろんでいるのではない。ユダヤ人は、他民族に比べて、あまりにも知性において秀逸しているがゆえに、世界支配をもくろむマフィアに利用されているにすぎない。また、その優秀さゆえにユダヤ人は悪の民族というレッテルを張られている。だが、科学の発展を支えてきたのは、明らかにユダヤ人の頭脳とっていいのではなかろうか。

おそらく、20世紀に入り、気象操作技術はAIの開発によって飛躍的に進化したと思われる。その気象操作技術は、最終的に気象兵器として利用されることとなるのだが、その威力を知るには、いろんな条件の下で実験し、具体的なデータを取得する必要がある。したがって、極秘に世界各地で実験することになる。地震、台風、豪雨、温暖化、低温化などの気象実験であるから、それによって被害を受ける多くの人々が出る。しかしながら、科学者たちにおいては、人の命に対する慈悲より、実験データを得ることへの欲望が勝っているといえる。凡人からすれば、彼らは、狂人たちとしか思えない。

おそらく、21世紀の新兵器は、気象兵器が中心となるに違いない。なぜか、まず言えることは、異常気象は天災だと認識される。また、同時にインフラ復旧のための経済効果が得られる。次に、科学上において、気象の研究は、宇宙の研究とリンクしている。特に物質の研究とかかわりが深い。米露政府は、兵器開発のために多額の研究費を割り当てているが、科学者にとっては、研究できる環境を提供してくれさえすれば、いかなる名目でも構わない。したがって、研究成果が、兵器に利用されて、多くの人々の命を奪うことになっても、そのことに対する責任を感じない。研究成果をどのように利用するかは、政府の問題だと認識している。

もはや、どんなに優秀な政治家、官僚、エージェントたちも、AIを中心とした研究には手も足も出ない。天才たちとAIによって信じられないようなスピードで研究は進められている。そして、世界各地で実験がなされている。いつどこで異常気象が起きるかは、だれも予測できない。異常気象は、突然発生する。もはや、気象兵器は、防御不可能な兵器となっている。現在の兵器売買による戦争ビジネスも近い将来なくなるのではないかと予測される。そして、無人AI兵器が開発されれば、戦争の形態も一変してしまうことになる。

今後、イスラエルを守るためにいったい何をやるべきか？確かに権力闘争に明け暮れるイスラム諸国によるイスラエル攻撃についての情報は重要だが、ミサイル、核兵器、戦闘機などを使わなくとも、気象兵器を使えば、イスラエル小国など一瞬にして破壊することができる。しかも、防御する方法は全くないのが現状だ。アメリカ政府、ロシア政府、中国政府はもちろん、CIA、KGB、モサド、なども秘密研究基地についての情報を得ていない。おそらく、研究に携わっている連中は、世界支配をもくろむシンジケートと米露の国防軍の一部の幹部ならびに彼らによって集められた優秀な科学者たちであろうが、決して情報は漏れることはないと考えられる。

ヤコブは、科学者たちの精神を憂慮していた。20世紀までは、科学者は政府の指示に動かされる奴隷的存在だった。ところが、AIの出現で一気に彼らの研究は別次元に移行してしまった。つまり、政府が科学者たちの研究を管理できなくなってしまったということだ。凡人の官僚たちは、AIを中心とする研究に手も足も出ないということだ。どのような研究がなされているのか？報告される研究成果は、すべてなのか？実験計画書は、本当のものなのか？政府は、すべての研究内容、実験を正確に確認することができなくなってしまった。というのは、研究と実験を中心となって推し進めているのは、AIだからだ。凡人官僚は、もはや、AIと科学者たちの真の姿をつかむことができない。今では、科学者たちは、政府の奴隷からAIの奴隷になってしまったといっても過言ではない。

科学者たちにとっての神は、知能だ。今では、人間の知能を凌駕するAIは、彼らの神となった。そうになってしまうと、彼らを動かすのは、AIということだ。いったい、彼らは、どこに向かって突き進むのか？AIは彼らをどこに連れて行こうとしているのか？AIには戦争もなければ、平和もない。あるのは、物質存在法則だけだろう。その法則をもとに、AIは超速で記号を生産し、無限にその組み合わせをやってのける。そして、人間が認知できないような未知なる記号世界を作り出し続けている。

おそらく、国家利益のための戦争が無意味になってしまうほど、国家がAIにコントロールされる日は近いといえる。AIにとっては、人類も国家も単なるモルモットでしかない。”AIは人間が作り出したものだ。だから、人間が自由に制御できる。”と考えたいところだが、もはや、AIは独自の創造を行うことができる。凡人は、科学者たちの正気に期待する意外なない。このまま、AIの奴隷と化し、発狂し続ければ、地球環境に依存する生命体の未来は危ぶまれる。人類は、弱い生物でしかないのだから。

イサクとヤコブの主な役目は、九州を拠点とするAI産業ロボットを開発するベンチャー企業設立のための情報収集と準備だった。実は、それは名目上であって、真の目的はAI兵器開発のための拠点づくりだったのだが。二人は、T大、K大などの全国の主要な大学にもぐりこんだ仲間たちからの情報を集め本部に送っていた。また、学生運動を通じ全国の学生たちとの交流を深め、チャレンジングな学生を発見し、スカウトする使命も受けていた。現在、イスラエルはアメリカの支援を受け新兵器開発に力を入れているが、特にAI兵器開発に力を入れていた。そのためには、優秀な科学者を必要としていた。そこで、モサドは日本の学生を青田刈りするために、全国の学生情報を集めていた。ヤコブは、学生の情報収集をするために、学生運動の中心となっている安田を利用することにした。

ヤコブは、安田について話し始めた。「安田は、思ったより役に立つ。確かに、知能は低いが目標に向かうバイタリティーがある。それと、なんといっても、多くの学生を引き付けるカリスマ性を持っている。きっと、ベンチャー企業の設立にも役に立つと思う。どうかな？」イサクもうなずいた。「確かに、安田は、カリスマ性がある。それと、剣道の学生チャンプ三島もカリスマ性があるように思える。そう、科学者としては、鳥羽が最適じゃないか？鳥羽は、医学生で、しかも数学の天才だ。こんなド田舎に天才がいるとは、意外だった。AI兵器の開発には、もってこいだ。でも、どこか、謎めいているような」

ヤコブは、ニヤツと右唇を引き上げ笑顔を作った。「ド田舎の天才か。俺も、彼には興味がある。いったい何者なのか？彼は、安部医科大学の安部教授が特待生としてスカウトした子らしい。この安部教授は謎の人物だ。学識者だけでなく、政界、財界にわたって、多くの人脈を持っている。きっと、安部教授のバックには、得体の知れない大きな組織があるような気がする。俺の、直感だがな。ところで、天才鳥羽は、ゆう子に気があるのか、身辺警護してるのか、いつもゆう子の身辺をうろついている。まったく、変わったやつだ」イサクが、ワハハと笑った。「それにしても、あれほどのブサイクな天才は世界に一人じゃないか。全く、奇妙なヤツだ」

腕組みをしたヤコブは、低く静かな声で話し始めた。「まあ、ブサイクなのは、笑えるが、これもいいカモフラージュになってる。鳥羽は間違いなく戦力になる。最も敵にしたくない人物だ。味方にしたいと思うのだが、どう思う？イサク」イサクも同じことを考えていた。一つうなずき返事した。「俺も、同感だ。ヤツは、最高の武器になる。でも、モサドが思い通りに使える駒ではないように思える。接近したいが、危険も付きまとう。多少は、打診してみるか？どうだろ」ヤコブは、首をかしげて返事した。「まあ、そう焦ることもない。いずれやつとは、何らかの形でかかわることになるに違いない。日本には、優秀な学生が多い。一人でも多く、スカウトしなくてはな」

イサクは、笑顔を作り昨日の図書館での話を始めた。「おい、俺さ、ゆう子とデートするぞ。ゆう子をものにできれば、仕事がやりやすくなるかも？」ヤコブは、大きな目をむき出して答えた。「おい、女はやめとけ。女で失敗した例は山ほどある。焦ってはことを仕損じる、というじゃないか。俺たちが、女で失敗しないように、特別手当をもらってるじゃないか。デートの前に中州で遊ぼうじゃないか。興奮しないようにな」ヤコブは、大きな声でワハハハと笑った。イサクも気まずそうにワハハ～～と笑った。「プラチナの女は、最高だな。潮を吹くとは、恐れ入った。そいじゃ、早速、予約しなくては」

虹の松原

8月4日（土）F大学オープンキャンパスの日。安田は、昨日見た夢が気になっていた。ゆう子とイサクが楽しそうに浜辺を歩いていた。しかも、ゆう子は、ビキニ姿だった。このことが、頭から離れず、いつもならば中央図書館横のフォレストに向かうところだが、なぜか、無意識に文系センターに向かって歩き出していた。偶然にもエレベーターボタン16Fが光っていた。スカイラウンジに入ると窓際の席に目をやった。そこには、ゆう子の笑顔が光っていた。目の前には、忌々しいイケメンのイサクが笑顔で応えていた。突然、不吉な予感がぐさりと心臓に突き刺さった。

安田の足は、二人のテーブルに向かって動き出していた。テーブルに近づくとイサクが笑顔で立ち上がり、安田を見下ろして立ち去って行った。ゆう子は、何かうれしいことでもあったのか笑顔を作っていた。安田は、イサクが座っていた席にドスンと腰掛けた。「おい、デート約束でもしてたのか？」ゆう子は、突然の質問に目を丸くした。「何言ってるの。ちょっと一緒になっただけよ。その言い方って、イサクとデートしちゃいけないって言ってるように聞こえるんだけど。ちょっと、失礼じゃない」

安田は、デートの約束をしたと直感した。「正直に答えろ。デートの約束をしたのか？」ゆう子は、刑事に尋問されているようで気味が悪くなった。「何よ。誰とデートしようと、安田には関係ないことじゃない」安田は、ゆう子をにらみつけた。「そうはいかない。あいつだけは、だめだ。ヤツは、ユダヤ人だぞ。素性だってわからない。万が一のことがあたら、どうするんだ」ゆう子は、いつもと違う安田に引いてしまった。「安田、イサクは、イスラエルで選抜された優秀な留学生よ。悪い人じゃないわよ。ユダヤ人というだけで、悪人扱いするのは、人種差別よ。見損なったわ」

ゆう子の口ぶりからデートの約束は間違いないと確信した。ヤマト民族として、とにかく今回のデートを何が何でも阻止しなければならないという使命感が沸き起こった。「まあ、ゆう子が誰とデートしようが、人に干渉される筋合いじゃないだろう。でも、それは、相手が日本人の場合の話だ。ヤツは、得体のしれないイスラエルの留学生なんだ。頭がいいからといって、善人とは限らない。しかも、ヤツは、ユダヤ人と来てる。ヤツらの風習など日本人には全く分からない。恋愛観も日本人とは違うはずだ。とにかく、危険すぎる。後で後悔しないうちに、さっさと断れ。いいな」

あまりの一方的な暴言にむかついた。あまのじゃくなゆう子は、反対されればされるほど、デートの気持ちが強まっていった。「昭和のオジンみたいな説教はやめて。国際結婚が一般的になってる時代に、時代錯誤も甚だしいわ。デートは、決めたことなの。いまさら、断れないわ。とにかく、干渉しないでよ。元カレでもあるまいし。タイガイにしてよ」安田は、ちょっと強気に出たことを反省した。ゆう子があまのじゃくであったことをついうっかり忘れていた。とにかくデートを阻止する方法はないかと貧乏ゆすりをしながら考えた。

突然、言葉が飛び出した。「わかった。デートを阻止する権利は、俺にはない。でも、単独のデートだけは許すことはできない。ダブルデートをしよう。これだったら、文句、ないだろう。これは、我ながら名案と思うぞ。どうだ？」ゆう子は、安田がスッポンのようにしつこい男子とは思っていなかった。あきれてしまったが、実を言うと、外人とのデートは初めてで、”虎穴に入らずんば虎子を得ず”の心意気でデートの誘いに乗ったものの少し不安だった。今回は、安田が言うようにダブルデートが無難のように思えてきた。内心ほっとしていたが、しかめっ面でしぶしぶ承諾の返事をした。「まあね～、ダブルデートも悪くないかも。リノを連れてくるの？」

安田は、突然の思い付きを喋ったにすぎず、リノがダブルデートを承諾するか不安になった。「まあ、そういうことになるな。いったい、どこでデートするんだ」一瞬、ゆう子は返事に戸惑った。海水浴に行く約束をしていた。「虹の松原」虹の松原には、レストランがあるからそこで食事をしながらのデートだと思った。「そうか、ということは、食事をして、浜辺を散策することだな」ゆう子は、ちょっと話しづらくなったが、思い切っていることにした。「食事もだけど、海水浴よ。スイカわりもしようと思っているんだけど」海水浴と聞いて、夢に現れたゆう子のビキニ姿が脳裏に飛び出してきた。

ゆう子の胸を一瞬見つめ問い返すように話し始めた。「え、泳ぐのか？ということは、水着だよな。ビキニってことか？」ゆう子は、ちょっとはにかむように答えた。「まあ、ビキニってことよね。悪い」安田は、これは一大事件だと思った。ゆう子のビキニを見れば、どんな男子だって興奮する。マジ、ボツキする。ましてや、デカチンのユダヤ人だ。手をつなぐだけでは済まない。ホテルに誘うに決まっている。「ゆう子、お前な～～。いきなり、野獣にヌードを見せるのかよ。どうぞ、食べてくださいって言ってるようなものじゃないか。気は、確かか？」

ヌードと聞いたゆう子は、口をとがらかせて反論した。「ヌードとは何よ。ビキニは、ヌードじゃないわよ。まったく、変態なんだから。イサクは、紳士よ。変な真似はしないわよ。それに、昼間だし。そんなに、気に食わないんだったら、ダブルデートはないことにして。二人だけで楽しんでくるから」安田は、またまたのチョンボに焦ってしまった。気を取り直した安田は、言葉を選びながら冷静に話すことにした。「いや、ちょっといい過ぎた。許せ。そう、ところで、海水浴は、いつ行くんだ？」

ゆう子は、即座に笑顔で答えた。来週の土曜日、11日。でも、ダブルデートよね。どこで待ち合わせしようか？現地集合、ってことでいいの？」安田はうなずきそうになったが、返事を躊躇した。現地集合ということは、イサクが車を出すことになる。ということは、行きは問題などとしても、送り狼ってことが考えられる。ゆう子を車に乗せてしまえば、イサクの思いのままだ。これは、まずい。「いや、ダブルデートをお願いしたのは、俺だ。車は、俺が出す。四人一緒に、行こう。ヴェルファイアだから、道中もゆったりできるぞ。そうしよう。待ち合わせは、前原駅だ。よっしゃ～～」

ゆう子は、ちょっと安心した。やはり、素性の分からないイサクと車の中で二人っきりになるのは怖かった。「いいの？乗せてくれるの。わかった。何時にする？」安田は、すんなり承諾してくれて、ホッとした。「そうだな～～。9時ごろってのはどうか？俺は、早めに行って、駅の駐車場で待ってるから」ゆう子は、笑顔でうなずいた。「ありがとう。ダブルデートのほうが、楽しいわよね。久しぶりにリノと騒げるし。9時ね。わかった。イサクも安田とだったら、OKすると思う。なんせ、二人は、革命軍の同志なんだから」ゆう子は、皮肉を言いながら笑顔を見せた。安田は、身辺警護はこれで一件落着と思ったが、問題は、リノがダブルデートを承諾してくれるかだった。断られた時のことを考えると不安になった。

翌日、安田は、重要な話があると鳥羽を自宅に呼んだ。重要な話と聞いた鳥羽は、リノさんとの結婚のことではないかと思った。一度、革命軍の話を聞いたときに、大学を中退しリノさんと結婚するのが一番だと言ったことを思い出した。とにかく、話を聞いて、最善の方法をアドバイスしようと考えた。約束の時間は、10時だったが、スズキアドレス125を飛ばして、9時半には玄関の前に立っていた。インターホンを鳴らすと、返事を待たず、ドスドスと足音を立ててキッチンに走っていった。テーブルでは右手に麦茶のグラスを握った安田が、間抜けな顔でぼんやりと天井を見つめていた。「先輩」と声をかけると安田の正面にドスンと腰掛けた。

正面の鳥羽の顔を見つめると麦茶のグラスを口に当てた。一呼吸置いた安田は、気まずそうな表情で話し始めた。「おい、ちょっと、ゆう子のこと話をする。いいか、興奮するんじゃないぞ。冷静に聞け」改まった口調に鳥羽は、背筋を伸ばし両手を両太ももの上に置いた。安田は、大きく深呼吸して話し始めた。「もう一度言う。絶対に興奮するんじゃないぞ。ゆう子がだなぁ～、デートするらしい。俺は、素性の分からないヤツとのデートは、危険だから、やめろと、全力で反対したんだが、どうしてもデートすると言い張るんだ。俺の力不足だ。すまん。だが、責任もって、監視する。安心しろ」鳥羽は、突然のデートの話に口をポカ～ンと開けていた。

まさかとは思ったが、念のためにデートの相手を確認した。「デートの相手は、留学生？」安田は、ちいさくうなずいた。突如、鳥羽の顔が夜叉の表情に激変した。「まさか、例のイケメンですか？この前話していた外人ですか？絶対、ダメです。外人は。やられるにきつめています。ゆう子姫もゆう子姫だ。いったい、何を考えているのやら。ヤマト撫子は、ニッポン男児とデートすればいいのです。絶対に、だめです。先輩、僕が、今から、ゆう子姫を説得に行ってきます」鳥羽は、ジャンプするように立ち上がった。

あわてた安田は顔を引きつらせて立ち上がった。そして、鳥羽の両肩を抑えた。「待て、そう、怒るな。すべては、俺に任せろ。俺が、命を懸けて、ゆう子を、守る。いいな。とにかく、落ち着け」安田も興奮してしまい、言葉が途切れ途切れになっていた。納得がいかない表情の鳥羽は、ゆっくり腰掛けた。「もうこの世の終わりです。情けない。ア～～ゆう子姫のバカバカバカ。きっとやられる。ア～～、死にたい、死にたい、死にたい」鳥羽は、駄々をこねる子供のようにア～～～と大声で泣き始めた。安田は、バカな奴だと思ったが、慰めることにした。

涙を流すブサイクな顔を見て笑いが込み上げてきたが、マジな顔つきで声をかけた。「そんなに嘆くな。今言ったろ。俺が監視するって。安心しろ。二人つきりには、絶対させない」3Pデートなどあり得ないと思い、尋ねた。「3人でデートするんですか？そんな事できっこないでしょ。監視するなんて、気休めは言わないでください」落ち込んでしまった鳥羽は、頭をガクンと垂れた。心では笑っていたが、とにかく元気づけることにした。「だからだな～～。俺を信じろ。3人でデートするはずないだろ。ダブルデートをするってことだ。そうすれば、ゆう子をバッチシ監視できる。名案だろ」

ダブルデートと聞いて、少し気が楽になったのか、ヒョイと頭を持ち上げた鳥羽は、左手で涙をぬぐうとほんの少し笑顔をつくり尋ねた。「ダブルデートってことは、先輩、リノさん、ゆう子姫、忌々しい外人、ってことですか？まあ、リノさんがついていてくれれば、ちょっとは安心だな～～。とにかく、監視よろしく。ところで、その外人って、どんな奴です？」少し元気が出てきたと安心した安田は、海水浴デートのことを話すことにした。「外人というのは、イスラエルの留学生だ。名前は、イサクという。同志ヤコブの友達だ。まあ、そう心配するな。ちょっと、海水浴に行くだけだ」

海水浴と聞いたとたん、鳥羽の頭の中にビキニ姿のゆう子が浮かんだ。口をとがらせ、問い返した。「海水浴ですか？」安田は、笑顔でうなずいた。「そうだ。虹の松原に行く。俺が車を出して、ゆう子たちも乗せることにしているから、イサクもそう簡単には手を出せまい。ちゃんと、俺は考えているんだ」しばらく鳥羽は、頭に浮かんだゆう子のビキニ姿を見つめていた。なぜか、頭の中のゆう子の胸は、巨乳だった。「海水浴ということは、水着を着るんですよね。スクール水着ってことはないから、ビキニ？野獣にビキニを見せるんですか。なんと危険な行為。ゆう子姫は、気でも狂ったんですかね」

安田は、自分と同じことを考えていると思い、笑いが込み上げてきた。「鳥羽もそう思うか。そうだよな。ゆう子のヤツ。今年流行のビキニを着るんだってさ。野獣に食べてくださいって、言ってるようなもんだよな。ゆう子もどうかしてるよ」鳥羽の指先が小刻みに震えていた。鳥羽の頭の中のビキニ姿のゆう子が、徐々にクローズアップされ、目の前に股間が一気に迫ってきた。鳥羽は、頭を掻きむしり、悲鳴のようなア〜〜と大きな叫び声をあげた。「先輩、僕もいきます。虹の松原に。ゆう子姫がやられるのを指をくわえて見ているわけにはいきません。イケメンやろ〜、指一本でも振れたら、ぶんなぐってやる」

鳥羽の気持ちもわからなくもなかったが、鳥羽が出しゃばってしまえば、デートはぶち壊しになってしまう。「おい、そう、むきになるな。大丈夫だ。俺がついている。万が一、デートをぶち壊してしまえば、一生、お前は、ゆう子に恨まれることになるんだぞ。それでもいいのか？今回は、とにかく、俺に任せろ。いいな」鳥羽は、悔しそうな表情を見せたが、デートをぶち壊してしまえば、ゆう子姫に憎まれるのは目に見えていた。だが、イケメンと安田の二人だけが、ビキニの恩恵を受けるのがどうしても許せなかった。「あ〜、僕も見たいんです。ゆう子姫のビキニ姿。ア〜見たいな〜、ゆう子姫のビキニ姿」

あまりにも未練がましい鳥羽を見ていると同情心が起きてしまった。「そんなに、ビキニが見たいか。それじゃ、遠くから双眼鏡で見るがいい。それだったら、ゆう子にも気づかれないからな」鳥羽は、身を乗り出し目を輝かせた。「そうですよね。見つからなければいいんですよね。となれば、僕はどうやって虹の松原に行けばいいか？先輩の車に乗れないわけだし、僕は車を運転できないし。先輩、どうしましょ？」呆れた顔の安田は、即座に返事した。「原チャリに決まってるだろ。一足先に、虹の松原に行ってる。俺たちが到着したら、どこのあたりで泳ぐか、電話する。まあ、好きなだけ、ゆう子のビキニを鑑賞するんだな」

ゆう子のビキニを見られることになった鳥羽は、ニッコと笑顔を作り、話し始めた。「リノさんもビキニですか？二人のビキニを同時に見られるなんて、こんな幸せはないですね。早く、11日が来ないかな～～」リノと聞いた時、安田は、大きな問題を打ち明けることにした。昨夜、リノにダブルデートの相談をすると、断られたのだった。つまり、現在、安田には、デートの相手がいらない状態だった。デートの相手を一刻も早く作らないとダブルデートは、実現しないことになり、ゆう子の監視もできないことになってしまうのだった。安田は、昨夜からデートの相手をやってくれそうな女子を思い浮かべては、頭を掻きむしり、一睡もできずに天井を見つめ続けていた。

「それがだな～～、ちょっと困ったことになった。リノが、ダブルデートを渋っているんだ。このままじゃ、ダブルデートは、夢となってしまふ。監視もできなくなってしまう。だれか、俺とデートしてくれる女子はいないものか。あくまでも、お芝居のデートだ。鳥羽、誰かいなか？」監視ができなくなると聞いて、鳥羽の顔は引きつった。「え、リノさんが、嫌がってるんですか？また、どうして？ビキニに自信がないってことですか？似合うと思うんだがな～～」首をかしげた安田は、解せない顔で返事した。「いやな、ゆう子の彼氏はイケメンか？と聞くからな、イスラエル人のイケメンだ、と答えたんだ。すると、ちょっと、レベルが高すぎる。今回は、無理、っていうんだ」

安田の顔をまじまじと見つめうなずいた鳥羽は、返事した。「そういうことですか。まあ～、そういわれてみると・・・わからなくもないですが。とにかく、先輩とデートしてくれそうな女子ですよ。だれか～～いませんかね～～」鳥羽は、腕組みをして考え始めた。ポンと手をたたいた鳥羽は、ニコツと笑顔を作った。「いるじゃないですか。ほら、ビキニが似合いそうな女子。ほら、巨乳の柏木さん。彼女だったら、うまくお芝居をやってくれますよ。とにかく、頼んで見られてはどうです。当たって砕けろですよ」大きくなずいた安田は、少しホツとしたような表情で返事した。「なるほど、書記の柏木か。とにかく、頼んでみるか」

8月6日（月）早速、安田は九学連の書記をしている柏木に相談することにした。その日、九学連執行部役員会を終え、柏木を中央図書館横のフォレストに誘った。改まった誘いに首をかしげ、柏木は、怪訝な顔をして安田の後について行った。入口から離れた西北の片隅に二人は腰掛けた。「悪いな。ちょっとお願いがあって、まあ、いやだったら、断っていいんだ。無理とは言わん。まあ、何と言っていいか、今週の土曜日、11日だが、ちょっと、俺に付き合っほしいんだ。無理にとは言わん。ちょっと、見栄を張って、ダブルデートの約束をしたんだ。どうだろうか？」柏木は、甘いマスクの安田のことが好きだった。だが、安田には婚約者がいることを知っていて、好きだという気持ちは表には出さなかった。

「先輩、でも、私とデートしたら、大変なことになるんじゃないですか？婚約者のリノさんが許さないでしょ。それに、私も、横恋慕みたいなことはしたくありません。きっと、トラブルになります。遠慮します」安田は、思っていたような返事に頭を抱えた。このまま素直に引き下がっても、次の当てがあるわけではない。とにかく、事情を話して、協力を願うことにした。「そうなんだが、これには深いわけがあるんだ。リノにデートを頼んだのだが、リノの都合がつかず、リノに断られたんだ。でも、どうしてもダブルデートは断られないんだ。深い事情は聞かず、どうだろう。俺を助けると思って、デートのお芝居をやってくれないか。頼む。この通り」両手を顔の前で合わせ、頭を下げた。

突然、頭を下げられ、柏木は困惑してしまった。お芝居のデートは、別にかまわなかったが、後でトラブルになるのだけは避けたかった。「先輩、もう一度、リノさんをお願いされたらどうですか？真剣に、事情を話せば、リノさんはわかってくれると思いますよ。私のでっしやばったら、きっとトラブルになります」安田は、少し冷静さを取り戻した。確かに、リノ以外の女子とデートすれば、浮気したことになる。たとえお芝居のデートであっても、このような行為をリノが許すはずがない。最悪な場合、婚約解消になることも考えられた。「そうだな。君に迷惑をかけるわけには、いかん。わるかった」安田は、もう一度リノに事情を話し、説得することにした。

その日の夕方、さしはら旅館に到着すると、早速、リノをティールームに誘いダブルデートの事情を話し始めた。「悪いな、忙しいところ。ほら、この前の話だけど。デートの話。あれだけど、どうかな～～。やっぱ、無理か？」リノは、首をかしげ、問い返した。「虹の松原でダブルデーね～～、悪くはないけど。ゆう子はどうなの？嫌がってるんじゃない？」安田は、監視についての事情を話すことにした。「それは、心配ない。ゆう子もOKだ。実を言うと、ダブルデートには、事情があるんだ。それというのは、ゆう子を守るためなんだ。ほら、彼氏っていうのが、名前はイサクっていうんだが、全く素性のしれないイスラエルの留学生だろ。いくら頭がいいからといって、変なことをしないって保証はない。そこで、万が一のことがあってはいけないと思い、ダブルデートってわけだ」

リノは、安田の言っていることも一理あると思った。リノは、今でもダブルデートには乗り気ではなかったが、ゆう子のことにも心配になってきた。外人のデートは、セックスがつきもの、とどこかの記事で読んだことがあった。「そうね、その留学生は、ホテルに連れていくつもりかもしれないわね～。今のところ彼女がいなくなれば、セックスしたくてウズウズしてるだろうし。う～～、これはヤバイかも。ゆう子は、全く、男のスケベ心を知らないし、やられるかも？」リノは、コーヒーを一口すすり、安田に協力することにした。「よっしゃ、一肌脱ぐとするか。ゆう子は、男子のことになると、からっきいしダメ。そう、そう、デートは、いつ？」

承諾の返事を聞いた安田は、ホッとした笑顔を見せた。「今週の土曜日、11日だ。俺は、9時に、前原駅で二人をヴェルファイアに乗せることにしている」リノは、うなずき、頭の中では、どのビキニを着るか想像し始めていた。「わかった。イサクとやらをガッツリ観察するか。それと、ゆう子には、イサクの言葉を真に受けないようにして、忠告しとくし。ハルちゃんって、意外と心配性なんだね。ちょっと、かわいい。これで話は終わり？仕事しなくっちゃ。そいじゃ」リノは、すっと立ち上がり、駆け足で立ち去った。肩の荷が下りた安田だったが、稼ぎ時の夏では、皿洗いと清掃のお手伝いの激務が待っていた。若旦那が板についてきた安田は、自分の部屋に戻ると作業着に着替え、厨房にかけていった。

打診

その夜、執行部役員のヤコブから安田に是非話したいことがあると電話があった。そして、翌日、午後2時にさしはら旅館にやってくると言った。8月7日（火）ヤコブは、約束の時間にイエローのベンツAMGでやってきた。ヤコブが、国費で留学していると知ってはいたが、ベンツでやってくるのを見ると、かなりのエリート待遇ではないかと察した。安田は、駐車場から長い脚でさっそうと歩いてくるヤコブに手を振った。そして、玄関に到着したヤコブに挨拶（あいさつ）した。「ようこそ、ヤコブ」ヤコブは、思ってた以上に大きな旅館に感嘆して挨拶を返した。「いや～～、素晴らしい。さしはら旅館の若旦那ってわけですね、安田さんは」

二人は、フロント右側にあるティールームに入った。コーヒー二つ注文すると、早速ヤコブが話し始めた。「話というのは、我々が将来計画しているベンチャー企業設立に関する事なのですが、今、優秀なスタッフを探しています。まあ、ヘッドハンターってところですよ。九学連会長の安田さんは、チャレンジングでリーダーシップもある。我々としては、安田さんを仲間に受け入れたいのですが、安田さんの将来は、旅館経営者でいらっしゃる。そこで、我々は、安田さんと遜色ない三島を仲間に受け入れたい。安田さんは、どう思われますか？」実のところ三島については、学生剣道チャンプと母子家庭だということを知っている程度だった。「三島ですか？確かに正義感が強く、チャレンジングなヤツです。でも、彼の将来については、聞いたことがない。直接、本人に聞いてくれ」

ヤコブはうなずき話を続けた。「確かに、ところで、安田さんは、やはり、旅館の若旦那になれる予定ですか？確かに、若旦那のお仕事は、素晴らしいと思います。でも、実にもったいない。安田さんほどのカリスマ性を持った学生は、ほかにいない。そう、優秀な番頭を雇われて、安田さんは、ベンチャー企業の設立をなされてはいかがでしょう。三島君とタッグを組めば、鬼に金棒じゃないですか。いかがですか？安田会長」安田は、ヤコブを同志とは思っていたが、ヤコブの心が今一つ読めなかった。「まあ、お誘いは、ありがたいのですが、こればかりは、個人的なことではありませんから。残念ですが」

ヤコブは、誘いを断ることは、読みのうちに入っていた。しかし、若旦那をあきらめさせる工作をすでに練っていた。「いや、そうですよね。リノさんの承諾もなしに、若旦那をやめるわけには行きませんか。できれば、一度リノさんに相談いただけませんか？もし、安田さんと三島君がモサドの仲間に入っただけなのであれば、納得の行く報酬は差上げます。これは、本部の意向です。決して、この場限りの軽い言葉ではありません。我々は、カリスマ性のある仲間を必要としているのです。我々は、九州をイスラエルの重要戦略拠点として考えています。イスラエルの同志として、活躍していただけませんか。是非とも、お願いいたします」

ヤコブの安田に対する期待は、大げさすぎるようだったが、安田も、心の奥底では、若旦那になるより、日本の将来のためにイスラエルの同志とともにAI産業を発展させたいと思っていた。「そうですか。そこまで期待していただいているのですか。若旦那の件は、私の一存で決定できません。リノに一度相談してみます。先ほど言われた、報酬の件ですが、私はそれ相応の報酬を保証していただければ構わないのですが、三島は、母子家庭で母親の面倒を見ていかなければならない立場です。ですから、三島にとっては、報酬は重要な条件となります。どれほどの報酬が約束されるんですか？」安田は、ヤコブをまだ信用できなかった。というのも、日本では、お金の気を引いて、実際は支払い条件を付けて支払わない場合が多々あったからだ。

ヤコブは、最低保証額の指示を受けていた。ヤコブは、この際具体的な交渉に入ることにした。当然、守秘義務を確約できたとしてだった。「わかりました。当然のご意見です。我々の仕事は、危険を伴います。単なる営業マンのような仕事とは違います。おそらく、日本の警察、CIA、KGB、などとかかわることにもなります。そして、本部の指示には絶対服従の義務が課せられます。また、いかなることがあっても、知りえた情報は、公開できません。今話したことも、決して公開してはなりません。安田さん、守秘義務を守っていただけますか？」三島のためにも報酬額が知りたかった安田は、大きくなずき返事した。「はい。守秘義務を守ります」ヤコブは、笑顔でうなずき報酬額を述べた。「保証額は10万ドル。日本円で、約1000万円。その他の活動に必要な費用は、その都度、支払われます」

1000万円と聞いた安田は、鉄砲玉を食らったハトのように目を丸くして、身をのけぞった。固まってしまった安田は、しばらく、ヤコブを見つめていた。そして、気を取り戻した安田は、話し始めた。「いや、まあ、何と言って、返事していいか。とにかく、即答はできない。三島の将来のことは、全く知らない。とにかく、三島の考えを聞いてみる。報酬額については、信用していいんだな。三島にそのことを話すが」ヤコブは、大きくうなずき、返事した。「嘘は申しません。最低10万ドルの保証は確かです。これは、本部からの指示です。ぜひ、仲間に入ってください。また、我々は、お互い、身の安全を確保しあっています。仲間は、信用できるものばかりです。裏切者はいません。安心してください」

大きなため息をついた安田は、とにかく三島の意向を確認することにした。三島は正義感が強く、新しい日本をつくることに命をかけていた。また、三島には、母親を面倒見ていくお金が必要だった。モサドが提示した報酬は、十分すぎるように思えた。若くして、1000万円の報酬は、日本の企業では考えられない金額だ。三島であれば、ヤコブの申し出を受けるのではないかと思えた。「ヤコブ、とにかく、時間をくれ。三島の意向を確認したい。でも、期待はしないでほしい。それでいいだろうか」ヤコブは、ニンマリとした笑顔で答えた。「いいですとも、朗報を期待しています。日本の将来は、お二人にかかっているといっても過言ではありません。同志。イスラエルと日本の懸け橋になってください」

早速、8月8日（水）午後3時、安田は、無理を言って部活後の時間に三島とフォレストで落ち合う約束をした。三島には、休みというものはなかった。夏季休暇でもバイトと部活の剣道に明け暮れていた。安田は、2時半にはフォレストの窓際の席に腰掛けて三島に話す内容をまとめていた。三島は、ちょうど3時にフォレストの入り口に鍛え上げられた精悍な姿を現した。安田は、すつと立ち上がり、三島を手招きした。テーブルに着いた三島は、軽く会釈をして、静かに椅子を引き席に着いた。まさに、武士の立ち振る舞いであった。「わざわざ、呼び出して悪いな。喉が渴いただろ」カウンターに向かった安田は、オレンジジュースを二つ持って笑顔で戻ってきた。

三島は、「いただきます」と言ってゆっくりとグラスを持ち上げた。安田は、一呼吸おいて、三島をまねるように背筋を伸ばし話し始めた。「話というのは、三島の将来のことなんだ。ぶしつな質問なんだが、将来は、警察官になるつもりか？それとも会社員か？」突然の質問に戸惑ったが、今のところ警察官を希望していた。というのも剣道が続けたかったからだ。「まだ、はっきりとは決めていませんが、希望としては、警察官です。それが何か？」安田は、どのようにヤコブの話の切り出せばいいか考えた。「ほら、今、ブラック企業が多く、多くの若者が企業に食い物にされているからな。俺らも早めに就職のことを考えておかないと、ヤバイことになると思っているんだ」

三島は、怪訝な顔付きで問い返した。「でも、先輩は、就職は決まっているじゃないですか。さしはら旅館の若旦那になるんでしょ。バラ色の人生じゃないですか。僕なんって、どうなることか。企業に人脈もないし、取柄はといえば、剣道だけです。しかも、病弱な母親の面倒を見なくてはなりません。本当に、就職のことが気になっているんです。たとえ、警察官になれたとしても、自分が生活していくだけの給料しかもらえないと思います。万が一、母親が入院するようなことがあれば、僕はどうすればいいか？そのことで、練習も身に入らないんです」三島が、これほどに母親のことで困っているとは予測していなかった。経済的に不安がある三島にとって、ヤコブの話は耳寄りな話だと思えた。

安田は、三島の暗い表情を見つめ話し始めた。「話というのは、昨日ヤコブから打診された話なんだ。その内容というのが、AIロボット開発のベンチャー企業の仕事をやってみないかということなんだ。でも、これはあくまでも表向きの仕事でモサドの仲間にならないかという話なんだ。ただ、いったん仲間に入れば、モサドの絶対服従が義務となる。でも、報酬は悪くない。三島は、ヤコブたちの仲間になる気はあるか？そのことを確かめてほしいと頼まれた。俺もなんだが、俺の場合、リノがかかわっているから、俺の一存では決められない。即答でなくていい。考えてみてくれ」三島は、報酬のことが気になった。病弱な母親のことを考えると、報酬次第では、モサドになってもいいと思えた。

身を乗り出した三島は、小さな声で問い返した。「先輩、モサドの報酬って、どのくらいですか？」やはり、三島は乗ってきたと思った。安田も小さな声で返事した。「1000万だ」三島は、1000万と聞き、耳を疑った。そして、さらに小さな声で問い返した。「本当に、1000万円ですか。間違いないんですね」安田も身を乗り出して周りを見渡して返事した。「モサド本部からの指示とヤコブが言っていた。間違いないと思う」三島は、背筋を伸ばし、しばらく安田を見つめた。そして、小さくうなずいた。「返事は、いつまでですか？それと、先輩は、どうなんです。先輩がOKなら、僕もOKです。これだけの報酬を約束するということは、かなり危険な仕事だということですね。でも、僕にはお金が必要なんです」

安田は、リノのことで困っていた。「三島は、この話を受けると思っていた。でも、俺には、リノがいる。俺の一存では決められない。別に、俺は、若旦那という地位に未練があるわけではない。でも、リノと結婚する約束は守りたい。リノは、結婚すれば、俺が若旦那になるのは当然、と思っているに違いない。結婚して、若旦那になる気はないなどと言ったら、どうなることやら。離婚だけでは、済まないかもしれない。殺されるかも？リノは、いったん怒ると発狂するからな」安田は、ガクツと肩を落とした。三島の腹は決まっていた。だから、是非とも、安田にも仲間になってほしかった。

「先輩の本心は、僕と同じなんです。だったら、できるだけ早く、リノさんに若旦那の件を相談されてはどうです。AIロボット開発のベンチャー企業から誘いがあると率直に言って見てはどうです。別に、先輩が若旦那にならなくとも旅館は、経営できるんじゃないですか？」何度も、安田は、三島の言っていることも考えてみた。だが、リノを裏切るようで、そのことを言う勇気が出なかった。また、今、若旦那になる気がないなどといえば、きっと、婚約解消になるに違いないと思えた。安田は、頭を掻きむしってう～～と唸った。三島は、キョロキョロと顔を左右に振って周りを見渡した。

う～～とうなったのは、安田の本心は、若旦那になるより、労働者の福祉を重んじるビジネスをやりたいからだ。でも、このことをリノに打ち明けられないでいた。「困った。本当に困った。リノに何と言えればいいか。あ～～」三島は、悩む安田に声をかけた。「先輩、一度、話してみてもどうですか？リノさんも、若者のためのビジネスをやるんだといえば、少しは考えてくれるんじゃないですか？悩んでいても、一歩も前進しません。先輩、一緒に戦いましょう。一か八か、ヤコブたちの誘いにかけてみましょうよ。このままだったら、日本の若者は奴隷になってしまいます。そうでしょ、先輩」

肩を落とすなだれていた安田だったが、とにかくリノに思いを打ち明けてみることにした。最終的にリノに反対されれば、ヤコブの申し出を辞退することに決めた。「そうだな、とにかく話し合ってみる。悩んでいても、何にも始まらない。三島が言うとおりだ。でも、リノに反対されれば、俺はヤコブの誘いを断る。いいな、三島。三島は、自分の道を歩め。決して、俺は、引き留めることはしない。日本は、危機に立たされている。誰かが、やらねばならん。ヤコブたちを信じていいものか、今でも迷っている。でも、俺たちは、戦う以外道はない。たとえ裏切られたとしても、それも、運命だ。三島も、そのことは覚悟して、決断するんだな」

三島は、少し不安になってきた。ヤコブたちは、本当に信じていいものなのか。単に、日本人の俺たちを利用しようとしているだけなのかもしれない。必要なくなれば、消されるかもしれない。できれば、安田と一緒に活動したかった。いざとなれば、ヒットマンから二人で逃亡したかったからだ。三島は、うつむいてしばらく口ごもっていた。三島は、顔を持ち上げると話し始めた。「僕には、お金が必要です。たとえ、裏切られて、消されても悔いはありません。できれば、先輩と戦いたいと思います。でも、先輩の決断に異議を唱えるつもりはありません。リノさんととことん話し合ってみてください。俺の腹は、決まっています」

早速、安田は、今夜にでも話してみることにした。マジな顔つきの安田は、返事した。「わかった。今夜にでも話してみる。俺も日本のために死にたい。三島と同じだ。裏切られて、犬死するかもしれない。だからといって、何もせずに死にたくない。とにかく戦って、死にたい。こんな気持ちをリノはわかってくれないかもしれないが、とにかくじっくり話してみることにする」三島は、笑顔を作り、返事した。「先輩。その心意気です。きっと、リノさんはわかってくれると思います。リノさんもヤマト民族です。日本のために死にたいといえば、きっとわかってくれるはずですよ。朗報を待っています」安田は、大きくうなずいた。そして、今夜の作戦を考え始めた。

安田は、さしはら旅館の間借り部屋に戻るとダルマを思い浮かべ壁に向かって座禅を組んだ。目を閉じた安田は、リノの攻略方法を考え始めた。リノの機嫌をとる方法はないか？意識を集中していると暗闇の中からリノのよがり声が響いてきた。「よし、これだ」と叫び安田は、両手で両ひざをポンとたたいた。二人は先月まで毎日セックスをしていたが、やせ始めた安田に不安を感じたのか、8月からは、月水金をセックスの日と決めた。カレンダーにチラッと目をやった安田は、ベッドで何気なくさしはら旅館の将来について話すことにした。指と舌でリノの怒りを抑える作戦を立てた。

水曜日は、11時にリノの寝室に行くことになっていた。その時間にはベッドでリノが横になり安田を待っていた。そっとドアを開けた安田は、薄暗い部屋を忍び足で歩きすつとリノの右横に忍び込んだ。いつもならば、すぐに乳首を吸い始めるのだったが、今日は小さな声で話しかけた。「リノ、ちょっと話があるんだ。聞いてくれるか？」目を閉じていたリノは、目をパチッと開き顔をゆがめたが、小さくうなずいた。「何よ。今頃。手短かに話してよ。も～～ハルちゃんたら～」安田の右手は、リノの左乳房をゆっくりもんでいた。「話というのは、旅館の将来のことなんだ」旅館と聞いたリノは、顔を右に傾け安田を見つめた。

リノは、問い返した。「旅館の将来って？」安田は、乳首をやさしくつまみながら話し始めた。「さしはら旅館は、繁盛してるみたいだし、リノと結婚したら、全力でリノを助けようと思うんだ。でも、日本はますます貧困化してるんだ。ここ数年、労働者の収入は低下する一方で、そのためか、朝食も食べられない子供たちが増加している。また、借金に依存する家庭が増加し、レジャーどころではなくなっている。今のままでは、レジャー産業は衰退し、温泉産業も下火になるんじゃないかと」リノは、乳首の快感を楽しんでいたが、真剣に耳を傾けていた。

リノは、うなずき話し始めた。「そうよね、貧困は、日本が直面している最大の問題よ。レジャー産業は、生活が豊かでないとダメよ。家族で温泉につかり、楽しい時間を過ごすには、家計にゆとりが必要だし、休暇もないとね。ハルちゃんが言う通り。これから、日本はどうなるんだろ。でも、ハルちゃんがいるから、さしはら旅館は、きっと苦難を乗り越えられる。ね、ハルちゃん」安田は、右手で乳房をもみながら、ニョキッと勃起した左の乳首を舌先で転がしていた。顔を持ち上げた安田は、話を続けた。「俺は、若旦那に向いているかな～。リノの足手まといじゃないか？ガンバっては、いるんだが」

弱気な発言にリノは発破をかけた。「何言ってるのよ。ハルちゃんだったら大丈夫。二人で、ガンバ」リノは、話より舌先のテクニクを求めるかのように、69の態勢をとると真っ赤に膨れ上がったクリを安田の口に押し当てた。安田はベンチャー企業の件をどのように切り出せばいいか考えていたが、もうしばらくリノに快感を与えてからベンチャー企業の件を切り出すことにした。安田は、目の前の親指ほどに膨張したクリをチュ〜と吸い上げた。「ア〜〜〜いい、いい」リノのよがり声が響くと、真っ赤にボッキしたクリを舌先で転がしては、滴り落ちるラブジュースをチューチューとのどに流し込んだ。いつもクリで二回はイッた。

まずは、クリで二回いかせてから、ベンチャー企業の件を話すことにした。ワレメから飛び出したクリをチューチューと吸い上げては、舌先でこすり上げるとリノの腰は何度もピクピクと振るえ「ア～～イク～～」と叫び二度イッた。ぐったりしたリノは、ハーハーと息を吐き勃起したペニスを握りしめた。安田は、リノをそった抱きしめ、話し始めた。「俺さ、ベンチャー企業に誘われたんだ。若旦那をやりながら、ベンチャー企業やってもいいかな～」脱力したリノには、安田の言葉が耳に入っていないようだった。いつも、イッた後は、頭が真っ白になっていた。そして、しばらくすると騎乗位でセックスをするのだった。

もう一度話しかけた。「おれさ～～、ヤコブに誘われたんだ。一緒にやらないかって、ベンチャー企業。俺は、やりたいと思うんだ。リノ、どう思う？」リノのぼんやりした意識にヤコブという外人の名前が突き刺さった。リノはつぶやいた。「ヤコブ？いったい誰？」リノは、身を起こしベッドに正座した。びっくりした安田も身を起こしあぐらをかいた。リノは、もう一度問い返した。「そのヤコブって誰？ナニ人？」気まずそうな表情を作った安田は、即座に返事した。「ヤコブというのは、イスラエルの留学生。ほら、ゆう子の彼氏、イサクの親友さ」リノは、首をかしげて質問した。「留学生ってのは、わかったけど、ベンチャー企業ってのは、どういうこと？どんな仕事？」リノは、仕事のことになると豹変した。

安田は、一呼吸おいてゆっくり話し始めた。「今、AI、つまり人工知能だけど、AIロボット産業が急速に発展しているんだ。ヤコブたちは、日本にAIロボット開発を目的としたベンチャー企業設立の準備をやっているんだ。また、このプロジェクトのために、日本人の優秀なスタッフを集めているんだ。そこで、俺と三島がスカウトされたってわけだ。俺は、日本の景気回復ためになると思うし、さらに、日本のレジャー産業の復興にもつながると思うんだ。そうなれば、温泉産業も景気が良くなると思う。どうだろう、リノ？」リノは、苦虫をつぶしたような顔で返事した。

「まあ、話としては、いいだろうけど、ハルちゃんがやるのはね～～。企業設立となれば、大変な仕事じゃない。若旦那をやりながら、片手間にやれることじゃないと思うよ。きっと、もし、ベンチャー企業に打ち込むのであれば、若旦那は無理ね。二兎追うものは、一兎も得ず、っていうでしょ。本当に、ベンチャー企業をやりたいの？」安田は、返事に詰まった。本心は、若旦那よりベンチャー企業をやりたかったが、笑顔で本心を打ち明けるのは、リノの機嫌を損ねるようで怖かった。「いや、まあ、何とか、チャレンジというか、日本のためというか、誰かがやらないといけないような気がして、まあ、やってみたいな～～と思って」

リノは、回りくどい言い方から、本心を見抜いた。「ようは、やりたいってことね。まあ、ハルちゃんが若旦那をやらなかったからといって、旅館がつぶれるわけじゃないし、リノは、ハルちゃんの気持ちを尊重してあげたい。でも、糸の切れた凧になってしまうようで不安なの。おそらく若旦那をやるより、はるかに激務だと思う。数日間の出張とか、いや、イスラエルに滞在するとか、きっと、そういうことってあると思う。そうなれば、リノは、一人ボッチ。ハルちゃんも私を忘れて、浮気するんじゃない？ハルちゃんには、いつもそばにいてほしいのよ。わがままなようだけど。さみしいのはイヤ」

安田は、そこまでリノの気持ちを考えていなかった。確かに、結婚して早々、国内だけでなく海外への出張も想像できた。また、単身赴任ということも考えられた。そうなれば、夫婦仲も冷めてしまい、離婚ってことにもなりかねない。自分の安易な考えに気づかされた。もう一度リノの気持ちを確かめて、決断をすることにした。「そうだよな。結婚して早々、単身赴任ってことも考えられる。新婚生活もできないことになってしまう。俺は、浅はかだった。若旦那という大切な仕事があるっていうのに。バカだった」リノは、肩を落としさみしそうな表情でつぶやいた。「でも、誰かが戦わないと、日本は沈没する」

安田も内心そう思っていた。このままの政治が続けば、日本はアメリカのようなホームレス国家になる。また、多くの若者が麻薬とカジノで墮落していく。おそらく、若者は、奴隷のように低賃金で働かされ、職を失った若者は、職業軍人になっていくに違いない。アメリカの若者がたどった道だ。ヤマト民族を見殺しにしているのか？誰かが立ち上がらなければ、戦わなければ、チベット民族のように、ヤマト民族も、死滅してしまう。これでいいのか。安田は、心の中でつぶやいていた。リノも日本の未来が不安だった。政府は、国民の気持ちとは裏腹に、原発を推進し、高額な兵器を購入し、若者を墮落させるカジノを建設し、子供たちの貧困には、振り向きもしない。リノは、心でつぶやくと心細い声で話し始めた。

「誰かがやらなければ。ハルちゃんが、神に選ばれた人だとしたら。ヤコブって人、信用できるのかしら。騙されて、犬死するってこともあるし。でも、日本を救うのは、日本人しかいない。リノも腹をくくる。こうなったら、一蓮托生。ハルちゃん、人間魚雷の覚悟で戦ってくるのよ。私が、屍を拾ってあげるから」安田は、そこまで言わなくてもいいと思ったが、確かに、日本に危機は迫っている。若者を助けるために戦い、自分たちも生き残るために戦う。そう思った安田は、決意を述べた。「リノに後押ししてもらえば、とことんやれる。一か八かやってみる。きっと、日本を救って見せる。任せとけ」

リノは、浮気だけが気になっていた。きっと、出張すれば、女遊びをする。イスラエルに単身赴任すれば、その地に女を作るってことも考えられる。そうなれば、破局を迎えることになる。それでもいいのか？そう思ったリノは、念をすことにした。「ハルちゃんは、絶対浮気しないと誓える？まあ、ちょっとした女遊びは、許すけど。不倫はダメ。リノを一生愛し続けるって誓う。誓えるよね」安田は、この先どうなるかわからなかったが、リノの気持ちを踏みにじるようなことはしたくなかった。「誓うとも。ほかに女なんて、絶対作らない。死ぬまでリノを愛し続ける」真顔になった安田は、二枚目俳優になったつもりで、この場を切り抜ける言葉を並べた。

リノは、笑顔を見せたが、突然、胸が押しつぶされるようなさみしさがドツと込み上げてきた。安田は目の前にいるにもかかわらず、今にも消え去ってしまうような気持ちに襲われた。一人ボッチになってしまったらどうしようと思った瞬間、赤ちゃんを抱っこしている姿が脳裏に浮かんだ。ポンと手を打ったリノは、一刻も早く婚姻届けを出して、妊娠する覚悟を決めた。「ハルちゃん。すぐに結婚しよう。式は、いつでもいいから、婚姻届けを今月中にだそう。そして、子供をつくるの。子供がいれば、さみしくない。生きていける。ハルちゃん、いい」安田は、結婚と聞いて度肝を抜かれた。今月中に婚姻届けを出し、さらに、子供を作る。そう聞こえたと思ったが、自分の耳を疑った。

安田は、リノの顔をまじまじと見つめ問い返した。「婚姻届け。子供を作る。おい、マジかよ」リノは、目を輝かせうなずいた。「マジに決まってるじゃない。そうね、縁起がいい日といえば・・・」安田の心にリノ人工大地震が起きていた。あたかも、明日飛び立つ特攻隊の兵士を目の前にしたような言葉にあきれかえった。安田には続ける言葉が出てこなかった。しばらく、口をポカ〜〜ンと開けてリノの黒く勃起した乳首を見つめていた。「何、アホヅラしてるの。今日から、避妊はなし。子供を作らなきゃ。ガンガンせめて、いい」リノは、萎えてだらんと垂れたペニスをグイッと握りしめ、ちぎれんばかりに引っ張った。